図書館における日本語支援活動の現状と可能性

伊東　久実

はじめに

文科省の調査（2014）によると、平成26年５月の時点における我が国の公立の小学校、中学校、高等学校、中等教育学校、及び特別支援学校に在籍する日本語指導が必要な外国人児童生徒数は29,198人で、平成24年度調査より2,185人（8.1％）増加した。また、日本語指導が必要な日本国籍の児童生徒は7,897人で、1,726人（28.0％）増加した。日本語支援の重要性が増している。こうした現状への対応策として、文科省は学校教育における日本語教育を特別な授業の時間として教育課程に位置付ける措置を取った。

移民を多く抱える英国では、子どもたちの夏休み期間中に図書館における読書推進活動（Summer Reading Challenge、以下SRC）によって、第二言語習得活動としての英語支援活動を推進している。SRCを行う図書館員は、「われわれは、間接的に子どもたちの福祉と教育を担っている」と言い、地域に住むすべての子どもにサービスを提供する努力を行っている（伊東2015）。さらに、図書館員らは「図書館は、立場や職業を問われることなくだれでも気軽に入れる身近な場所であり、人間の生存にとって不可欠な学習権を保障する場として大きな役割を負う」と自負する。

わが国の図書館では、日本で暮らすマイノリティの知る自由・読む権利・学ぶ権利・情報へアクセスする権利を、彼らの母語を中心とした資料・情報の提供によって保障しようとする多文化サービスが、1986年以降広がりを見せている（日本図書館協会多文化サービス研究委員会2004）。多文化サービスには、『図書館用語集』（日本図書館協会用語委員会2013）によると、母語を中心とした資料・情報の提供の他、「いわゆる外国人に日本語学習の機会を提供すること、さらにはさまざまな異文化理解のための資料を提供することなどをも含めて考えることができる」と示されているが、日本に住む日本語支援を必要とする人に対する図書館の日本語学習支援の実態は果たしてどうであろうか。

本稿では、まず日本語支援活動の現状調査を行う。次に調査結果をもとに、図書館で現在行われている日本語支援活動の内容の検討を行い、図書館の特性を生かした日本語支援活動の可能性を考察する。なお、ここでいう図書館の特性を生かした日本語支援活動とは、絵本や本を介在させてコミュニケーションに取り組ませることによって第二言語習得を効果的に行う活動のことである。各地域に必ず存在する図書館に、その教育的資源を活用することによってより積極的な日本語支援活動の提供を呼びかけたい。

1．これまでの日本語支援活動

日本に暮らす外国籍の人々への図書館サービスの歴史的変遷を概観する。深井（1993）によると、日本の図書館が外国語資料を収集してきた歴史は古く、その目的は日本人が先進国の言語や文化を学ぶためであり、1970年代に至るまでは在住外国人のための当該言語の資料を収集するという発想は見られず、1972年の東京都立中央図書館の中国語資料と朝鮮語資料の収集が在住外国人のための資料収集の先駆けとなる。その後、1986年に開催されたIFLA東京大会の多文化サービス分科会において在住外国人や難民へのサービスが初めて本格的に紹介され、マイノリティの図書館ニーズを調査するようにとの決議が出された。こうした状況のもとで深井は、在住外国人の図書館利用について行った調査結果をまとめ、図書館を利用している人々の資料要求について明らかにしている。そこには、日本語教材や易しい日本語の資料（AV資料を含む）、彼らの母語で書かれた資料、英語の資料、CD・ビデオ・絵本・写真集など文字のない資料の要求内容が記され、これらの資料要求に対する資料収集とその提供の仕方が提案されている。この時点での日本語支援活動は資料提供のみに留まっており、日本語習得の機会は提供されていない。

在住外国人の図書館利用調査に関してさらに示す必要があるのが、「多文化サービス実態調査1998」である。日本図書館協会によって、1988年からこれまで、多文化サービスに関する実態調査は4回行われているが、日本語支援に関する調査は1998年の一回のみである。その調査項目は、外国語によるおはなし会、外国人のための日本語教室の実施の有無を問うものである。実施している図書館は、全国の調査対象2,272館中、わずか5.6％のみであった（日本図書館協会障害者サービス委員会1999）。

また、同じく日本図書館協会多文化サービス研究委員会による実践報告「大泉町立図書館のポルトガル語コーナー—群馬県大泉町の実践から」（糸井2004）には、大泉町立図書館の外国人児童の不就学対策として行う「多言語サロン」が紹介されているが、日本語指導の実施主体は図書館ではなく町教育委員会となっている。

2．日本語支援活動の現状調査

1章で明らかにされたように、日本語支援に関する実態調査は1998年を最後に長らく行われていない。一方で、多文化サービスを活発に行っている新宿区立大久保図書館長が、「外国人利用者からは日本語を学びたいという要望が強く伝わってくる」と話すように、日本語支援の必要性は高まっている。これらの現状を踏まえ、本稿では、調査対象を東京23区内に限定し、図書館での日本語支援活動の現状調査を行った。

2．1　調査方法・内容

有効回答数を上げるため、電話による聞き取り調査を行なった。

図書館の日本語支援活動の実施の有無と外国語図書・資料の所蔵状況について。

2．2　調査対象・時期

東京23区内公立図書館全223館と、公益財団法人東京子ども図書館の計224館。

平成28年４月20日から平成28年10月20日。

2．3　結果

2．3．1　実施の有無

日本語指導が必要な人を対象とした日本語支援活動実施の有無については、「実施している、あるいは実施したことがある」と答えた図書館は、224館中６館で全体の2.68％に過ぎなかった。その６館の活動内容の内訳は、「日本語教室に場所を提供している（図書館は場所を提供するのみ）」が４館、「（図書館員が）図書館の特性を生かした日本語支援活動を行っている」が２館であった。

2．3．2　外国語図書・資料の所蔵状況

外国語図書・資料の所蔵状況は、以下のとおりである。

【表１】外国語図書・資料所蔵の有無

所蔵状況	東京23区の224館
１．英語の図書・資料がほとんど	119館（53.13％）
２．英語以外の図書・資料もある	69館（30.80％）
３．外国語の図書・資料はほとんどない	36館（16.07％）

外国語図書は、全体の約84％の館に所蔵されているが、英語以外の図書も所蔵している館は約31％である。

以上、図書館の日本語支援活動の実施の有無と外国語図書の所蔵状況の調査の結果からは、日本語支援が必要な人への日本語支援活動はきわめて限定的で、所蔵は英語が中心であることがわかる。所蔵に関しては、英語母語話者に対する母語保持というより英語学習に関心の高い日本人のリクエストに応えるための所蔵であると考えられる。東京都総務局統計部（2017）に

よると、平成29年１月の時点で、東京23区内の主要10ヶ国の外国人人口は合計410,650人で、最も少ない千代田区でも2,665人在住している。こうした現状において図書館は、多文化サービス向上に努力を重ねているものの、日本語学習の機会提供や日本語を母語としない人に対する母語保持のための図書・資料提供は十分とは言えない状況にあることは明らかである。

３．日本語支援活動の内容検討

３章では、２章の調査で明らかになった図書館での日本語習得支援活動の事例を紹介し、コミュニケーションの質の観点から内容検討を行う。本稿でいう「図書館の特性を生かした日本語支援」とは、絵本や本を介在させたコミュニケーションを行うことによって第二言語習得としての日本語学習を効果的に行う活動のことである。活動の質の検討にあたっては、第二言語習得活動をコミュニケーションの質から分析する大下（2009）の分類を利用する。

３．１　大下の分類

大下（2009）は、日本の英語教育は、「FFI（Form focused Instruction、すなわち文法指導のことで、音韻、語彙、統語などの言語知識を教えたり、それらを定着させるために行う練習や活動）が主体」であり、コミュニケーション能力を養成する言語指導が十分に行われていないと指摘する。その上で、Brown（1991）とRinvolucri（1999）を参考にして、第二言語習得の授業で行われる活動をコミュニケーションの質に応じて４つに分類している。

①操作的活動

模倣活動やパターン・プラクティスのような機械的操作の活動。メッセージに対してはほとんど注意が向けられない。生徒が意味に注意を向けなくても活動を行うことが可能。

②情報処理的活動

情報をできるだけ正確に得たり発したりする情報授受の活動。例えば、場面を正確に描写したり、事実を述べたり、相手の言うことを正確に聞き取ったり、書いてある情報を正確に読み取る活動。

③解釈的活動

得た情報に対して自分なりに解釈を加えたり、意見や考えを述べたりするメッセージ性の高い活動。

④人間的活動

学習者が情意面で強いインパクトを感じる活動。③よりも学習者の自己投入を要求する。学習者の感動や同情、時には強い反発など学習者の感情が反映する活動。

以上のように、第二言語習得活動は、そこでのコミュニケーションの質によって４つに分類される。これらには階層性があり、④が最も学習者の自己関与の度合いが高く、言語の習得を

促進すると考えられている。

この分類に基づき、２．３．１で「図書館の特性を生かした日本語支援活動を行っている」と答えた２か所の図書館でこれまで行われた活動内容の質の検討を行う。

３．２　新宿区立大久保図書館の日本語支援の実践

３．２．１　図書館多文化共生サービスの概要

新宿区立大久保図書館は、韓国、中国をはじめ、ベトナムやネパールなどさまざまな国の人々が暮らす地域に立地し、多文化共生サービスを数多く取り入れている。それらは、外国語資料の収集、韓国語と中国語を話すことができるネイティブ・スピーカーの配置、外国語表記での案内、相互理解推進のためのイベント開催、そして外国籍の人を対象にした各種イベントである。

これらのうち、外国籍の人を対象としたイベントは、彼らの母語保持の目的だけでなく多文化交流活動として実施されている外国語のおはなし会や、「ビブリオバトル」、「多言語多読会」、「おはなし森のわくわくキャンプ」など日本語習得支援として位置付けられる活動がある。それらの３つの活動を詳しく紹介する。

３．２．２　ビブリオバトル

ビブリオバトルとは、「知的書評合戦」とも呼ばれ、次の手順に基づき本の紹介をし合うコミュニケーション活動である。

バトラーと呼ばれる発表者は、面白いと思った本を会場に持参し、一人５分間で本の紹介を行う。それぞれの発表後に、参加者全員でその発表に関するディスカッションを２、３分行う。全ての発表が終了した後に最も興味深いと感じた本を投票し、最多票を集めたものを「チャンプ本」とするという活動である（谷口2014）。

大久保図書館は、外国人と日本人のバトラーが一緒に本の紹介をし合う「ビブリオバトル・インターナショナル・オオクボ」を開催している。平成27年度の２回目の会では、外国人バトラー１名と日本人バトラー２名から成るグループを２つ作り、２ゲームが行われた。紹介された本は『鉢かづき』、『１リットルの涙―難病と闘い続ける少女亜也の日記』、『ドラえもんの国語おもしろ攻略　四字熟語100』、『The Atlas of Middle-Earth「中つ国」歴史地図 ― トールキン世界のすべて』、『真鶴』である。観客からは、「『１リットルの涙』を紹介したベトナム人女性は、最近日本に来たばかりとは思えないくらいしっかり紹介している」と評された。また、『四字熟語』を紹介した中国人女性は、「何度か言葉につまりながらもユーモアを交えての奮闘だった」と評されている。チャンプ本の表彰式終了後には、バトラーと観覧者を交えた懇親会が行われた。ビブリオバトルは、本の紹介にとどまらず本をツールに参加者同士が様々な話を

交わす時間を設けている。外国人バトラーが通う日本語学校の教師は、「バトルのために１冊の本を読み、内容を紹介し、質疑に応じる経験は、学生の日本語習得に非常に効果がある」と話しており、外国人バトラー自身は、「ドキドキしたがやってよかった」、「将来、図書館で仕事をしたい」と語る。

大久保図書館でのビブリオバトルは、大下の分類のいずれに該当する活動であろうか。この活動は、分類④の話し手の感動や同情などの感情が反映する人間的活動を複合的に行うレベルの深い活動であるといえる（表２）。④は意見・考え重視の活動であり、分類①、②の言語の機械的な操作が主となる活動に比べ、より長く複雑な発話を発したり、よりプラグマティックな言語使用が見られるなど、「豊かな言語学習の場を実現する可能性が高い」（Nakahara,Tyler & Van Lier2001）と評価される。

しかし、ビブリオバトルによる日本語支援活動の課題は、それが上級者向けであり、新たに中級以下の日本語学習者向けの活動方法が必要なことである。初級者（子ども）の場合、最初から意見や感情を明確に表現することは困難であるため、質問形式を取ることによって意見や感情を反映した発話ができるように、聞き手の発問を意図的かつ段階的に構造化する必要がある。

３．２．３　多言語多読

日本語多読のワークショップは、NPO多言語多読の協力で平成27年から開催されている。初回に会場の大久保図書館２階大久保地域センター会議室に集まったのは15名で、参加者の国籍はタイ、中国、ベトナム、台湾、アメリカ、フィリピンである。初級者が多く、日本語の本を読むのは初めてという参加者が半数ほどいた。まずテーブルごとに段階的に難度が異なる『レベル別日本語多読ライブラリー』が用意される。参加者は、日本語のレベルによって４つのテーブルに分かれて着座する。次に、以下の注意が与えられる。

① やさしいレベルから読む
② 辞書を引かないで読む
③ わからないところは飛ばして読む
④ 進まなくなったら、他の本を読む （粟野2012）

つまり、多読による日本語習得は、語彙や文法に捉われずに絵から推測してストーリーを読み進み、楽しく大量に読むことで語彙や文法を自然に身につける手法である。ワークショップの指導者である粟野真紀子氏は、「大量にインプットし、体中に日本語が溜まって来ることで、口から出したり書きたくなったりする」と語る。多読は、大量のインプット後のアウトプットを期待して行われるのである。

参加者は、各自のレベルに合った本を自分のペースで読み進め、２時間で８冊から14冊ほどを読む。会の最後には一番おもしろかった本を投票する。参加者からは、「日本語の勉強に役立ちます」、「とてもたくさんの本を読みました。楽しいです」などの感想が語られた。専門のテキスト『レベル別日本語多読ライブラリー』を用いての多読であったが、このワークショップをきっかけに、図書館に所蔵されている日本語の本の読書推進が図られる。

この活動は、インプット理論に基づく言語習得活動ではあるが、どの本が一番楽しかったか投票することは、大下の分類によると意見や考えを述べる③の「解釈的活動」に相当する（表２）。

しかし、多読の活動は、どんなに大量の書籍が用意されても、幼児が日常的に母語を浴びて育つ環境と同量のインプットを提供することは困難であろう。言語が自然にあふれ出るほどの大量の本を読書し続けるモチベーションがなければ多読の継続は困難だと想像する。現在のところ、多読を継続させるモチベーションの育成については具体的なアプローチはなく、「面白いと思う方へと読んでいけば自然に多読になる」（粟野2012）と考えられている。これに対し筆者がロンドンで視察したSRCには、インプット活動としての読書と本のあらすじや感想を述べさせるアウトプット活動を短い期間に交互に何度も行える工夫が施されていた。具体的には、子どもたちは約２か月間に６冊以上の読書を奨励される。最初に、図書館でステッカーを６枚貼ると完成する組み立て式シートが配布される。子どもたちは本を読んだら図書館を訪れ、図書館員に本の内容と感想をストーリーテリングする。この際、読んだ証としてステッカーを受け取り、６冊読むと６種類のステッカーを手に入れて組み立て式シートを完成させることができる。ステッカーばかりでなく、子どもたちのストーリーテリングに耳を傾ける図書館員の受容的な笑顔と応答的な反応もご褒美となり、これらに励まされて子どもたちは次の本を手にしたくなるという動機付けが用意されていた。

SRCの事例から考えられるように、多読の活動には短期間のインプットとアウトプットのサイクルが有効かつ必要であると思われる。アウトプットの機会を設けてインプットの量をさらに増大させる工夫が必要であり、アウトプットのさせ方も④に近づけるように自己関与度の高い発話を促すために工夫する必要がある。

３．２．４　おはなし森のわくわくキャンプ

「おはなし森のわくわくキャンプ」は、テントの中でゆったり読書を行い、アウトドア気分で本を楽しむイベントである。NPO法人地球野外塾、NPO法人みんなのおうち、公益社団法人シャンティ国際ボランティア会、桜美林草の根国際理解教育支援プロジェクトの協力の下で開催され、平成27年度で５年目を迎えた人気のイベントである。大久保図書館内の大久保地域センター多目的ホールには「えほんのテント」が設営され、テントごとに異なる絵本が置かれ

る。集まった子どもたちはテントの中で家族や友だちと自分の好きな本を読んで、本についての話を交わす。読みきかせも行われ、『おおきなかぶ』の読み聞かせの後は、「うんとこしょ、どっこいしょ」の掛け声を様々な国の言葉を使って楽しむ劇を行った。およそ4時間に及ぶ活動には、タイ、フィリピン、韓国、中国など様々な国籍の親子105人が参加した。会場には星や昆虫の絵本も用意され、親子がアウトドア気分を味わうための趣向が凝らされている。この活動への参加者は年々増加しており、イベント終了後には図書館利用者となって訪れる親子の姿が見られるという。

この活動は大下の分類の③にあたる。絵本を読んで感じたことや体験を人に話す活動は、「解釈的活動」すなわち「得た情報に対して自分なりに解釈を加えたり、意見や考えを述べたりするメッセージ性の高い活動」に相当する。課題としては、④のレベルに高めるために、絵本の読後に読者の自己投入、すなわち感動、同情、反発の感情を引き出す発問を意図的・段階的に行うことである（表2）。

3．3　東京子ども図書館の日本語支援

3．3．1　在日日系ブラジル人児童への支援活動の概要

東京子ども図書館は、1974年に設立され、2010年からは公益財団法人として運営される私設の図書館である。子どもたちへの直接サービスの他に、読書普及活動、調査・研究活動などを行っている。館外活動である在日日系ブラジル人児童への読書支援活動は、2008年の日本ブラジル交流年を機に開始された。読書支援活動では、日本語の習得に困難を抱える在日ブラジル人の子どもたちにブラジルの文化を伝えつつ、日本語でお話を届けている。2009年に実施した岩田小学校でのおはなし会の詳細を、綿引（2012）の報告に基づいて以下に示す。

3．3．2ブラジル昔話のおはなし会

ブラジル人児童が特に多い3年生を対象に、普通学級だけでなく国際学級と支援学級で2日間のおはなし会を実施した。2クラス合同の70人を対象に開かれたおはなし会は、しりとり絵本『ぶたたぬききつねねこ』のパネルシアターから始まり、「おいしいおかゆ」（グリムの昔話）、「マメ子と魔物」（イランの昔話）、「かめのこうらはひびだらけ」（ブラジルの昔話）が語られた。その後クイズ形式でブラジルの紹介を行ったところ、これらの活動を通してブラジル人児童の表情は、嬉しそうに、また得意気に変化していった。翌日、ひとりのブラジル人の子どもは前日の話し手を見つけると駆け寄っていき、「昨日の、おいしいおかゆの話は面白かったな」と、その話のあらすじを完璧に話した。この子どもは「日本語がわからず、口もきかない子ども」だったという。

このおはなし会の効果を、ある小学校教師は次のように述べている。

今回のおはなし会は、私たち教師にもたくさんの驚きと感動を与えてくれました。おはなしを聞いている子どもたちの表情や反応がいきいきとしており、特にブラジル国籍の、いつもはうつむきかげんの子どもたちが実にいきいきと手をあげ、何度も発表し、主張していた姿に、その場にいた教師は皆ビックリし、感動しました。（中略）また、おはなし会の後、子どもたちが「あの本はどこにあるの？」と聞きに来て、学校の図書館に行き探す姿が顕著にみられ、子どもたちの本への興味が今までとは違うものであることを感じました。（綿引2012）

大下の分類では、ブラジル人児童が昔話を聞いた後、ブラジルに関するクイズに答える活動は、②情報処理的活動に相当する（表２）。しかし、この子どもが、クイズの答えと共に自分の体験を語ったり、体験に基づく感想や感動を交えたりすれば、それは③解釈的活動、または④人間的活動へと発展する。この事例からわかるように、言語習得を促進するためには、子どもにクイズの解答を発表させるのに終わらず聞き手の質問に答えさせることによって、③または④の活動に発展させることである。どの活動でも重要なことは話したいことを自由に語れる環境を用意することで、そのためには子どもの話に興味深く耳を傾ける大人の存在が不可欠である。

【表２】図書館の特性を生かした日本語支援活動の質と課題

活動名	コミュニケーションの質	課題
ビブリオバトル	自分の感動や感激したことなどを話すことは、④「人間的活動」に相当	上級者向きの活動なので、中級、初級向きのバトル方法も必要。発問を意図的・段階的にに構造化する。
多言語多読	読後、どの本が一番楽しかったか投票することは、意見や考えを述べる③「解釈的活動」に相当	アウトプットの機会を設けて、インプットの量をさらに増大させる工夫が必要。アウトプットのさせ方も④に近づけるように自己関与度の高い発話を促す。
おはなし森のわくわくキャンプ	絵本を読み、感じたことや体験を話す活動は、③「解釈的活動」に相当	自己関与度の高い発話を引き出すために、発問を意図的・段階的に構造化する。
ブラジル昔話のおはなし会	昔話を聞いた後、クイズに解答する活動は、②「情報処理的活動」に相当	自分の体験を通しての感動や反発など、感情を反映させる発話を引き出す工夫が必要である

丸付き数字は、３．１で示した大下の分類に対応する

おわりに

日本語支援を必要とする人への日本語支援活動は東京都23区内の公立および私立図書館計224館においては、現在、きわめて限定的であることが明らかになった。また、すでに行われている日本語支援活動4例の質を検討した結果、それらのコミュニケーションは、情報処理的活動から人間的活動まで多様なレベルであった。レベルの浅い情報処理的活動であっても、課題を克服することでより深いレベルでの人間的活動に発展する可能性が十分にあることがわかった。日本語支援が必要な人々の増加が予想される中、各地域に必ず存在する図書館は、その教育的資源を活用して一層工夫を凝らすことによって日本語支援活動の場として活用されることが期待される。

参考文献

粟野真紀子・川本かず子・松田緑(2012)、「多読のすすめ」『日本語教師のための多読授業入門』、アスク出版、pp.16-20

糸井昌信（2004)、「大泉町立図書館のポルトガル語コーナー—群馬県大泉町の実践から」、『多文化サービス入門』、日本図書館協会多文化サービス研究委員会，pp.84-91

伊東久実（2015)、「英国読書推進活動が重視するアウトプット活動」、『紀要44』、中部地区英語教育学会、pp.141-148

大下邦幸（2009)、『意見・考え方重視の英語授業—コミュニケーション能力養成へのアプローチ—』、高陵社書店，pp.22-26

谷口忠大（2013)、『ビブリオバトル—本を知り人を知る書評ゲーム』、文春新書

東京都総務局統計部（2017)、「東京都の統計」http://www.toukei.metro.tokyo.jp/gaikoku/2017/ga17010000.htm

日本図書館協会障害者サービス委員会（1999)、『多文化サービス実態調査1998　公立図書館編報告書』、社団法人日本図書館協会，p.7

日本図書館協会多文化サービス研究委員会（2004)、『多文化サービス入門』、社団法人日本図書館協会、pp.2-18

日本図書館協会用語委員会（2013)、『図書館用語集』、社団法人日本図書館協会、pp.187-188

深井耀子（1993)、「在住外国人への図書館サービス」、『公図書館の思想と実践』、森耕一追悼事業会，pp.272-291

文科省（2014)、「日本語指導が必要な児童生徒の受入状況等に関する調査（平成26年度の結果について)」http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/clarinet/genjyou/1295897.htm

綿引淑美（2012)、「二つのことばを生きる子どもたちへ—在日日系ブラジル人の子どもたちへの読書支援活動」、『こどもとしょかん135』、東京子ども図書館，pp.2-19

Brown,R.(1991)、Group work,task difference,andsecond langnage acquisition.Applied lingunistics,12,1-12.

Nakahara,Y.,Tyler,A., & Van Lier,L.(2001).Negotiation of meaning in conversational and information gap activities:A comparative discourse analysis.TESOL Quarterly,35,

Rinvolucri,M.(1999),Thehumanistic exercise.In J.Arnold (Ed.),Affect in langage learning (pp.194-210).Cambridge University Press.

謝辞

本稿を執筆するにあたり、調査にご協力いただきました新宿区立大久保図書館長米田雅朗氏ならびにNPO多言語多読副理事長粟野真紀子氏に心より感謝申し上げます。

【キーワード】

日本語支援、図書館、コミュニケーションの質